

若手教員を育てる「防災教育」のススメ

愛媛県愛南町立城辺小学校 校長 宮下 武浩

学校における防災教育は、若手教員の行動力を伸ばし、学校と地域社会の「つながり」を深める絶好の機会となります。その理由は、防災教育を進めていると、**地域の方々や関係機関との連携が自然な形で生まれてくるから**です。

本校の事例を紹介します。教員になって3年目の5年学級担任は、総合的な学習の時間に、児童とともに「防災」について探究しました。「自分たちが考えた避難所運営訓練をやりたい」という児童の思いを実現するため、学級担任は同僚や管理職に相談し、取組をスタートしました。そして、町の防災対策課と連携し、校内の研究発表会で保護者や地域の方々に避難所運営訓練の実施を宣言しました。それがきっかけで、公民館、女性消防団、婦人会、地元の高校の防災地理部など、多くの関係者が協力してくださることになりました。さらに5年生は、地元のケーブルテレビで訓練の予告CMを流し、地域の方々に広く参加を呼び掛けました。当日は、100名ほどが体育館での訓練に参加しました。

この一連の活動を通して、学級担任は、児童の主體的な学びを保障しながら、地域社会を動かす実践力と自信を身に付けました。若いうちに地域と連携する体験は、その後の教材開発の広がりや自身の資質・能力の向上につながっていきます。

ここで大切なのは、「失敗しても大丈夫。防災学習や訓練は、課題がたくさん見つかってこそ価値がある！」という管理職の意識と、若手の挑戦を後押しする校内の支持的風土です。「防災教育」は、未来を担う子供と教師、双方を育む最高のフィールドです。



小中連携で行う学校保健活動 ～中学生による小学生救命講習会を通して～

東京都杉並区立東田中学校 主任養護教諭 渡邊 利枝

10月21日、東京都養護教諭研究会10月研修会において実践発表を行いました。本校では養護教諭が保健委員生徒にAEDと胸骨圧迫を中心とした救命講習を行い、「ベーシックライフサポーター」として認定し、校内の緊急事態に備えています。昨年度から小中連携事業として、通学区域2校の小学6年生に保健委員の生徒が救命講習を実施しています。知識調査の結果は以下の通りです。

- 1 AEDの設置場所：講習前37.5%、講習直後96.9%、2月調査93.5%が「知っている」と回答。
- 2 AEDのパッドの装着位置：講習前31.8%、講習直後98.8%、2月調査86.3%が「知っている」と回答。
- 3 AEDの操作方法：講習前15.9%、講習直後93.8%、2月調査75%が「知っている」と回答。
- 4 胸骨圧迫の方法：講習前27.8%、講習直後98.8%、2月調査87.5%が「知っている」と回答。

児童の感想は、「人の命を守る力を持つ人はカッコいい」。中学生の緊迫した表情や真剣な態度に、「自分もあんなふうに人を助けたい」「命を助ける一歩をふみだした」と述べていました。5年生の保健の授業で救命処置を学び、6年生で先輩の中学生から救命講習を受けた児童が中学校入学後に保健委員になり、小学校へ救命講習に行く活動を定着させ、教職員や保護者とともに地域防災へつなげてまいります。